

2024 年 営巣状況

2024 年の十三崖では、営巣は確認されませんでした。これで、2020 年から 5 年間営巣がなかったことになります。また繁殖期を通じて、チョウゲンボウの飛来も観察されませんでした。一方ハヤブサは 2024 年も繁殖に成功し、5 月に 3 羽のヒナが巣立ちました。チョウゲンボウとハヤブサの巣が近い場合、チョウゲンボウのオスはハヤブサを避けることがデータ解析から明らかになっています。チョウゲンボウにとってハヤブサは生活に影響を与える大きな要因です。ところが、チョウゲンボウに影響を与える要因は他にもあることがわかってきました。

十三崖を含む集団営巣地のチョウゲンボウの営巣数の減少と、ハヤブサがチョウゲンボウの巣近くへ飛来した回数の関係をデータ解析したところ、無関係であることがわかりました。チョウゲンボウはハヤブサによって行動に影響はありますが、営巣数の減少にまでは影響しないようです。逆に営巣数の減少と関係があったのは、チョウゲンボウの餌であるネズミ類の減少とそのネズミが住む場所の草丈が低いことでした。つまり、十三崖でチョウゲンボウが営巣しなくなった要因の一つは、良好な餌場（ネズミ類とその生息場所）の減少でした。ネズミ類はチョウゲンボウが生息している場合、逃げ込める背の高い草地が必要です。その場所が少ないと、危険なためネズミ類は住まなくなります。そうすると、チョウゲンボウにとっては餌自体がなくなることになり、生活できなくなるのです。

十三崖の周辺環境は、天然記念物指定当時から大きく状況が変化しています。まず水田、桑畑が減少して果樹園が増加しました。そして一時遊休農地で草地が増加しましたが、その後おもにシャインマスカットの果樹園として利用されるようになりました。そのため、近年草丈の高い環境とネズミ類は減少しています。SDGs を推進する中野市としては、生物多様性の指標となる猛禽類であるチョウゲンボウについて、シャインマスカットの果樹園地帯で生活できる方法を考案し、十三崖での営巣数を再生させる必要があると考えられます。



ハタネズミをもって飛ぶチョウゲンボウのオス（撮影：小林進）